

長女の躰け浣腸

母紀子は、娘たちの毎日の健康状態を注意深く見ています。

年頃の子女には母親として教えなければならぬことが多々あり、将来娘たちが良い結婚生活を送れるよう、女としての必要な躰けと体調の管理をしなければなりません。

今朝は長女桂子の体調が優れないように見えました。

年頃の娘なので何があつたのか学校から帰つたら良く聞いてみよう、紀子は気にかけています。

家族のこと

私は裕子、中学二年生になりました。

父は文太郎47歳会社の役員で母紀子は42歳の専業主婦です。

子供は姉妹三人で上から高三の桂子、高一の郁子そして私（裕子）です。

ここは関東の古い町で明治の頃は絹織物で栄え、大河が悠々と流れ、背後に山に迫る美しい風景の町です。

この家は江戸から続く絹物問屋の古い家柄ですが、今は問屋はやめて私たち五人だけの生活になりました。

母の実家は隣町で、両親は教育者。今は引退し何時も二人で海外を旅行しています。

これは、主婦紀子の愛情浣腸物語です。

桂子の体調

五月のある日の夕方、姉の桂子が学校から帰ってきました。

何時もなら「お母さん！ たいま！」と大きい声で居間に来るのに、今日はそのまま自分の部屋に入ってしまった。

母が何か変だと感じたのか「桂子さん？」と言つて台所から早足で姉の部屋に行きました。

「桂子さん大丈夫？ 朝から元氣無いわね、お生理は未だでしょう？ 何かあったの？ もしかして痴漢？！」

「土曜日からお便所でダメなの。」

「えッ！ お便秘？ 四日目なのね。早く言わなければ駄目でしょう！ 女の便秘は癖になりやすいのよ。」

「電車の中でお腹が痛くなったけど、我慢して帰ってきたの。」

姉が説明しています。

「今お便所に行つてみます…」

「四日も溜めてたら便が硬くなって出すの辛いでしょう？ 無理すると肛門に傷がつきます。お浣腸しますから、着替えて待つていなさい。」

しばらくして母は、お盆に体温計、綿棒、ワセリン、脱脂綿、イチジク浣腸などのお浣腸のセットと濡れタオル、差し込み便器を持って姉の部屋に戻ってきました。

私は、姉がお浣腸されるのを見たくて隣の部屋に入り、襖の隙間から聞き耳を立てました。

「桂子さん。お浣腸しますから、下を脱いでベッドに寝なさい。」

「イヤンツ、お母さん！ もう大人なのに恥ずかしいわ。自分でしますから。ねえ、お母さん！」

「今日はお母さんがします！ もう直ぐ社会人になるのよ、最期の女のお尻の騾けです。さあ、脱いで！」

襖の隙間から覗くと、姉は壁に向かって横向なり母に向かってお尻を突き出す姿勢にされてしまいました。

「桂子さん。お便秘は今のうちに治さないと、大人になってから困りますよ。便秘持ちの女は女性としての魅力がありません！」

と言いながら姉のお尻をぐつと開いて肛門を出し、ワセリンを塗り込んでいます。

「少しお便を出すように息んでみて。肛門が緩くなりますから。」

姉がお尻を突出すようにして息むと

「はい！ そうそう、上手よっ！」

その瞬間、母はワセリンの指をスルつと姉の肛門に入れ、お便秘の状態を調べました。

「桂子さん、お便がだいぶ固まっているわよ！ このままお便出すのは無理よ。お尻が切れないよ

うにお浣腸して少し柔らかくしましょう。」

「お母さん。苦しい！ 早く、もう… お浣腸してください。」

母は肛門から指を抜いて、イチジク浣腸を持って薬液を少し出して空気を抜きました。

イチジクの浣腸

「桂子さん、お浣腸入れますよ！」

母は左手で肛門を大きく開きイチジク浣腸を差込み、ゆっくりとピンクの膨らみを潰しています。

姉のお浣腸の様子を見てみると、白い大きなお尻と母が持つイチジク浣腸のピンクの色がとても美しく、見ている気がモヤモヤしてしまいました。

「はい、入りましたよ。お浣腸が効いてくるまで、少し我慢してね！」

母はまた指を姉の肛門に入れお便の状態を見ているようでした。

「桂子さん。まだまだ固そうだからもう一つお浣腸しますね。」

姉は二つ目のお浣腸もいれられてしまいました。

「さあ、終わったわ。これからがお浣腸の大事な時よ、我慢よ！ お母さんがお尻押さえていますからね。」

「ハイ、ウンツ。お腹痛い！ お母さん。アアッ！」

「桂子さん、お母さんも子供の頃からお便秘だったのでよくわかるの。お婆ちゃんによくお浣腸されました。便秘症の女は美しく無いと何時も言われながらね。」

母は姉の肛門を押さえながら、自分の経験を話しています。

時々押さえの指を外して綿棒を持ち、姉の肛門に出し入れし肛門の動きや排便のタイミングを見ています。

「おかあさん！もう、苦しい！それダメ、いじらないで！我慢できませんーッ！」

「まだがんばってね！今はまだお便が硬いから、お尻が切れると後で困りますよ。もう少しお便を柔らかくしましょうね。」

「お母さん、もうダメ！出そうなの！もう辛くてッ。」

「まだ我慢できますよ。」と言って強く肛門を抑えながら、

「桂子さん聞いてね。大人になったら分かりますよ。女のお尻は大事なよ。お便秘が元になって痔疾になったらどうするの？貴女の綺麗な肛門が醜い肛門になるんですよ！そんなお尻を将来の旦那様見せられますか？女は結婚したらお尻を隠せないのよ！旦那様に毎日のようにお尻を見られて触られますよ。」

「ハイ、お母さん。恥ずかしいーッ！もうダメ、出そう！」

姉がお尻を振って泣き出しました。母は姉を上向かせ、両脚をあげさせてお尻を浮かせました。

「はい、もつと挙げて！お便器入れますよ。」

母は姉のお尻の下に差し込み便器を当てがい、お股を大きく開かせて、綿棒で刺激しながら姉の肛門を見えています。

「桂子さん、もう出していいですよ！息まずにゆっくりね！無理に出すと肛門が傷つきますからね。」

浣腸の効果

「ハイ、ああ！でちゃうー！」

姉は泣きながら母が見つめる前で、お便を出し始めました。

オシッコがチヨロチヨロと流れ出た後、直ぐに肛門が開き始め、膨れ上がった肛門からお便がゆっ

くり押し出され、固い塊がボタンとお便器に落ちました。

それが出ると一気に「ブブブビーツ！ ブリブリ。 ミチミチ、ブリ！ ニユルツ！」恥ずかしい音と一緒に沢山のお便が流れ出るように続きます。

姉はホツとしたように力を抜き、ため息をついています。

「桂子さん。 便秘のお便、いっぱい出ましたね！ 良かったわ！ まだ出そうなの？ 奥に残っていない？」

母はお襦袢替えの様に姉に両脚を抱えさせてお股を開き、肛門のお調べをしています。

またワセリンを指にとり、排便し終わった肛門に塗り込みながら言いました。

「桂子さん、こうしてワセリン良く塗っておくと次のお便所が楽ですよ。 良く覚えていてね。」

姉の頑固なお便秘は、母の慣れたお浣腸の手当で無事に終わりました。

「お母さん、ありがとうございます！ お腹ずいぶん楽になりました。」

姉は涙を拭いて、笑顔を作りました。

母は姉が出した便器の中の浣腸便を見せながら

「桂子さん、御覧なさい。 これだけお腹に溜めていたのよ、貴女は。」

姉にお便秘の内容を見せています。

「今度こんなにお便を溜めたら許しませんよ。 もっと早く言いなさい。 我慢したらだめですよ！

またこんなお便秘の状態だったら、今度はお尻にお仕置きしますよ。」

「ハイ気を付けます、お母さん！」

姉は母の顔を見つめ、そして母の胸に抱かれました。

私はそれを見てとても嬉しく暖かい気持ちになり、そつと自分のお部屋に戻りました。

母は年頃の娘に必要な、お便秘の時の躰をしたのでした。

桂子は次の日も母に浣腸されて、沢山の宿便を出されました。

便秘は女の身体を醜くすると、渾々とお説教されて、三日の間イチジク浣腸でお尻の躰けをうけたのです。

「女は結婚したらお尻を隠せないのよ。 便秘の痔持ちのお尻で旦那さまをお迎えするのは失礼です

よー!」

桂子は今日も母に浣腸されながら、母のこの言葉を噛み締め、綺麗な肛門のままお嫁に行きたいと、浣腸の苦しさに耐えながら母の愛を強く感じたのでした。

